

曲目解説

Siberian Rapsodies

(ゲオルギー・ニコラエヴィッチ・イヴァノフ)Georgi Nikolaevich Ivanov 作曲

「シベリア狂詩曲」

小穴 雄一 編曲

作者は、(1927～没年不詳)現代ソビエトのピアニスト兼作曲家。レニングラード音楽院を卒業後 1959 年から故郷ノヴォシビルスク音楽院で教授などの地位を得、1972 年同音楽院で作曲部門の教授となった。本曲の原曲は管弦楽曲であるが、グウリヤーエフがロシア民族オーケストラ用に編曲し、それを小穴氏が当アンサンブルの為に本年新たにマンドリン合奏用に編曲したものである。ロシアの民族楽器であるバラライカやドムラはマンドリンと同様にプレクトラム楽器(弦をはじく楽器)であり、トレモロ奏法(手を素早く動かす奏法)を用いるという点で共通性があり、民族的な旋律やリズムもマンドリンと非常に相性がよく、多くのロシア民族音楽がマンドリン合奏用に編曲され演奏されている。曲は、イ長調 4 分の 2 拍子で、ソリの鈴の音の様な軽快なリズムで始めると、軽やかに流れるような旋律が聞こえて来る。見渡す限り真っ白で広大な雪原が広がったシベリアの大地。マンドリンの軽やかな旋律の後には、ホ長調でマンドラが、のどかな感じの旋律を奏でる。Marcato Grave の部分に入ると静かな感じになりロシアの夏に見られる白夜の様子が想像される。再び最初の軽快なメロディーがハ長調で奏されたあと、ヘ短調 4 分の 3 拍子の悲痛な旋律へと移る。シベリアの厳しい冬の到来。演奏が静まり返ったあと、冬の物悲しいシベリアを思わせる旋律が奏される。しかし耳をすませば、大地の動きのような低音のピッチカート・・・シベリアの大地は春を迎える準備を始めている。待ちに待った春の到来。ト長調 4 分の 2 拍子で、冒頭の旋律に似た軽快なロシア風の舞曲が全合奏で奏され、その旋律は様々に変奏し、冒頭の流れる様なメロディーと重なり合って行き曲は陽気に進んで、最後の Vivace で華々しく終わる。

To elegiske melodier op.34～Varen

(エドヴァルド・グリーグ) Edvard Grieg 作曲

「2つの悲しき旋律」作品番号 34 番 より「春」

小穴 雄一 編曲

グリーグ(1843～1907)は、全てのクラシック音楽作曲家の中でも最も心のこもった、叙情的な作品の数々を残したノルウェーの作曲家である。彼の死後、20世紀初頭の新古典主義的音楽の華やかになりし時、「グリーグの音楽は時代遅れ、いつか忘れ去られていく種類のセンチメンタリズム」など酷評する評論家もいたが、1993年に没後百年を迎え、彼の作品は以前にも増して世界中で愛され、演奏されるようになった。殺伐とした方向に向かいつつある現代社会においてこそ、彼の優しく美しい音楽は求められている。本曲はノルウェーの農民詩人ヴィニエ(1818-1870)の詩に基づいて12曲の歌曲を作曲した。ヴィニエは独学で郷土色豊かな地方語に基づく詩を書いたが、民族的音楽の創作を目指していたグリーグを大いに刺激して、その詩に基づく歌曲15曲を続けて書かせるに至った。一番早い曲が1873年に作曲されているが大部分は1880年に作られた。これらは3曲外され12曲がおのおの「6つの歌」として第1集、2集として出版(作品33番)された。この完成の年(1880年)グリーグはベルゲンのオーケストラ、ハルモニエンの指揮者を引き受けたが、そこでの演奏を考えて作品33番第1集の中の2曲を弦楽合奏用に編曲した。第1曲目が「傷ついた心」第2曲目が「春」となっている。本日は「春」を演奏する。歌曲の内容は孤独と貧困の中に、52歳の生涯を閉じた詩人が、最後の春の到来を、自分にとっては最後の春であろうという感慨のもとに眺める、実に感情豊かな曲で、短い中にも一つのドラマがあり、潮が引く様に静まっていた後の沈黙は何とも言えないものがある。

Karelia, Suite op.11

(ヤン・シベリウス) Jean Julius Christian Sibelius 作曲

組曲「カレリヤ」作品番号 11 番

小穴 雄一 編曲

北欧を代表する作曲家シベリウス(1865-1957)の作品には、母国フィンランドの澄んだ空気や大自然、そして民族的な情感が色濃く反映されている。「カレリア」とは、スカンジナビア半島とロシアを結ぶカレリア地峡のことで、フィンランド人の先祖の一族にあたるカレリア人が住んでいたと言われる。作者が28歳の時に、カレリア地方の大学から、この地方の歴史的英雄を主人公とした劇音楽を依頼されて作曲した作品のうち、「間奏曲」「バラード」「行進曲調」の3曲を演奏会用としてまとめられたものが組曲「カレリア」である。今回は当アンサンプルの為に新たに編曲された、管楽器、打楽器を除いた、マンドリンアンサンプル版を演奏する。

第1曲 (間奏曲) まるで氷の結晶がカラカラとぶつかり合った様なマンドリンの微かな音色と、マンドチェロ、ベースの弱音から始まり、その上に遠くからマンドラの主題が聴こえて来る。次第に楽器の数が増していき頂点に達した後、最後はもう一度始めの部分が繰り返され静かに終わる。

第2曲 (バラード) ギターの民謡風の旋律から始まる素朴で抒情的な曲。後半の美しい歌が印象的である。

第3曲 (行進曲調) フィンランド農民たちの楽しい踊りを思わせるような明るく軽快な曲。

Pictures at an Exhibition (complete)

Modest.Mussorgsky(モデスト・ムソルグスキー) 作曲

「展覧会の絵」(全曲) ~ヴィクトル・ガルトマンの思い出

小穴 雄一 編曲

本曲は、原語のロシア語で「展覧会からの絵」の意味であり、ムソルグスキー(1839~1881)が音楽に表したのは、展覧会場に飾ってある絵そのものではなく、自由にふくらませていったイメージであった。ダーウィニズム(ダーウィンの自然選択説を中心とする学説で、生物の生活条件に注目し、その際生物相互の関係が最も重大であると言う説)を信奉し、進化する事に意義を見い出していた作者には、未完の作品や何度も書き直した曲が多く、本曲もその例外ではない。原曲(ピアノ独奏曲)は、親友であった画家・建築家のヴィクトル・アレクサンドルピチ・ガルトマン(1834-1873)の遺作展を訪れた時の印象が基になって生まれた作品で、遺作展の4ヶ月後の1874年6月に完成した。死後5年たって公開されたが、当初は大して注目されなかった。しかし、1922年にクーセヴィツキーがラヴェルに管弦楽への編曲を依頼し、1924年にクーセヴィツキー指揮・ボストン響で演奏されるや、これが大変な評判を呼んで一躍有名曲となった。その後、1958年にリヒテルの演奏などで原曲の良さが見直され、やっとピアノ独奏曲も管弦楽曲と同様に有名になった。本曲は芸術評論家ウラジミール・ワシリエヴィチ・スタソフ(1824-1906)に捧げられた。スタソフはロシア芸術のリアリズム的傾向を擁護し「5人組」の民族音楽を強力に支持した。この曲は異常なほどの強い表現を保持しており、その後、多くの作曲家達に編曲への興味を駆り立てた。原曲のモチーフがはっきりとしており、組曲として大きな魅力がある事、当時としては和声を多用していて革新的であった事、それでいて未完成な部分がある事などから、ピアニスト達や編曲者の感性を引き出すよい題材の様でもある。従って聴く側にとっても十人十色の違いを容易に識別でき、聞き比べが楽しめる題材であり、実に面白いピアノ演奏や、編曲が次々と出ている。ギター奏者の山下和仁が編曲したギター独奏曲版もその一例でもある。楽曲は、展覧会場を徘徊する作曲家自身を表すと言われるプロムナードによってつながれ、特徴のある小品群から成っているが、その一連の連鎖は「滑稽さと深刻さ」「叙情詩と無言劇」「速いものと遅いもの」「重いものと軽いもの」など相対するものの均衡を保つように巧妙に組み立てられている。そして同時に全体としては「ヒヨコのバレエ」を中心にシンメトリーな構造

をとっている。「グリムス」と「バーバ・ヤガー」は御伽噺、「古城」と「カタコンブ」は歴史的なもの、「テュイルリー」と「リモージュ」はフランスの暮らし、「ビドロ」と「ゴールデンベルグ」はポーランドの暮らし、というように、それぞれ共通性をもって対照的に配置されている。

プロムナード

展覧会を徘徊するムソルグスキー自身を表現。プロムナードは以下楽曲の合間に挿入され、楽曲から次の楽曲へ移る作曲家自身の心の動きを巧みに描写している。4分の5拍子と4分の6拍子が交差する素朴で力強い主題はロシア民族音楽の特色をもっており明らかに複合様式の聖歌の模倣と考えられる。楽譜には「ロシア風に」と表記されている。

第1曲 グノームス（こびと）

小さなこびとが曲がった脚で不器用に歩く様子を描いている。ガルトマンは芸術家協会のクリスマスツリーに飾るために寓話に出てくる、くるみ割り人形のおもちゃをデッサンした。ムソルグスキーの音楽はグロテスクなこの土の精のキャラクターを巧みに描写している。

第2曲 古城

イタリアのどこかにある中世の城の前で、トゥルバドゥール（吟遊詩人）がひとりたずみ恋のうたを歌っている。ガルトマンの作品カタログには、フランスの古城のスケッチが残っているが、イタリアのものは無いようで、このギター（あるいはリュート）伴奏によるセレナーデの旋律は、明らかにロシアの無言劇風で、イタリアからの引用はそのシチリアーノのリズム形態に留まっている。

第3曲 テュイルリー（遊びの後の子供たちの喧嘩）

この小さなスケルツォは、パリのテュイルリーの庭で子供達が家庭教師と戯れる様子を描いた作品がもとになっている。ガルトマンの絵は紛失したが、たしかに作品リストにはパステル画のスケッチが登録されていた。ムソルグスキーのなかには子供らしい無邪気な一面があった。子供たちの喧騒を描くめまぐるしい主題にはじまり、中間部では、なにやらねだるような甘い旋律が現われる。やがて、その喧騒も遠くのほうへ消えて行く。

第4曲 ビドロ

2頭の牛役に引っぱられた巨大な車輪を持つポーランドの四輪馬車が忽然と目の前に現われる。牛車はやがて段々遠くへ去っていく。bydloはロシア語では「ヴィドロ」と発音され「役畜」「農奴」の意もある。どっしりとした伴奏に乗って歌われる何か重く引きずるような主題は、压制下にあえぐ群衆の呻きの様でもある。

第5曲 卵の殻をつけた雛鳥のバレエ

原画は、ペテルスグルグノマリンスキー劇場で上演されたバレエ「トリルピ」の舞台衣装用に書かれ、「小さな子供達がカナリヤのヒヨコになってこの衣装をつけて叫び声をあげる」という場面で使われた。トリルピはマリウス・ペディパの振り付け、音楽はユリウス・ゲーバーによるバレエであった。題材はフランス人のシャルル・ノディエルの小噺「トリルピまたはアジーユの妖精」から引用された、きわめて繊細な描写音楽である。

第6曲 ザムエル・ゴールデンベルグとシュムイレ

ガルトマンの絵はポーランドのサンドミールでスケッチした2枚の絵。1枚は金持ちのユダヤ人。横柄な感じで荒々しく堂々とユニゾンでいきなり登場する。もう1枚は貧しい酔っ払い風のユダヤ人で、寒さのせいか、お酒のせいかな全身ガタガタ震えて怯えているかの様。ムソルグスキーはこれら2枚の絵を組み合わせると一つのドラマに仕立て上げた。最初はリッチなゴールデンベルグの登場。彼は何時だって尊大ぶっていばかりしている。やがて貧しいシュムイレは黄色い高い声でぺちゃくちゃ喋りだす。しだいにゴールデンベルグの威圧的な声が聞こえて、シュムイレを圧倒してしまう。

第7曲 リモーシュの市場

リモーシュの市場に集まったフランス女達が賑やかに他愛のないおしゃべりを始めた。ガルトマンの絵には、これに該当するものは無いと言われているので、これもムソルグスキーの創造力の産物と言える。

第8曲 カタコンブ〜プロムナード

カタコンブはローマン墓地のこと。プロムナードには「死者とともに死者の言葉をもって」という副題が添えられている。この曲は亡きガルトマンを偲ぶレクイエムになっている。ガルトマンの絵にはパリのカタコンブの内部を案内されている姿と共に右手には頭蓋骨の山が描かれている。

第9曲 鶏の足の上の小屋崖（バーバ・ヤガー）

ガルトマンのスケッチには鶏の足の上に小屋の形をした置時計が書かれている。ムソルグスキーはそれにほうきに跨って空を飛び回るバーバ・ヤガー（妖婆）に空想を巡らした。バーバ・ヤガーはロシアの民謡に登場する魔女で、森の奥深くに潜んでいる。帽子をかぶり彼女が持っている鶏の足を振り回して人々は不吉な運命へと導いていく。迷子になった子供を誘拐しては食べてしまい、その骨を砕いては巨大な漆喰に埋めてしまう。中間部の静かな部分は、なにかとてつもなく巨大な時計が刻む不気味な音の模倣の様である。

第10曲 ボガティルの雄大な門（首都キエフにある）

ボガティルとは古代ロシアの英雄たちの事で、キエフ市はその英雄を祭る凱旋門建設のためのデッサンを公募した。原画はその時のもので、スラブ風のアーチ状の屋根をもつ古ロシア的な石造り様式の建築物で、門には鐘楼と教会がついている。音楽は壮大なffの中に教会の鐘が轟き、聖歌隊の歌がこだます。「栄光のロシア」を見事に再現し、ロシア的なるもののすべてを凝縮させて曲を閉じる。

(曲目解説引用文献 アンサンブル・アメデオ〜第10回・第16回定演パンフレット 音楽之友社〜「北欧の巨匠」)

マンドリン合奏への編曲の試み

1989年マンドリン奏者の青山忠氏の依頼によりクリスタル・マンドリン・アンサンブル(青山忠氏が主宰)の為に編曲、第6回定期演奏会(1990年2月11日東京都武蔵野市民文化会館小ホール)で初演。センセーショナルな話題を呼んだ。原調はE♭が基調で、当初は合奏効果が懸念されたが、マンドリンのトレモロは思いのほかムソルグスキーの憂鬱な旋律に良く合い、ピッキングは歯切れのよい楽想にもマッチした。このマンドリン合奏版を第1版としてその後大編成に合わせ、打楽器、ピアノなどを加え、微妙な音色の変化が醸し出されるよう意図した第2版も演奏された。今回の演奏は、マンドリン奏者の井上泰信氏が主宰するARSNOVA Mandolin Orchestra 大阪公演(2002年3月17日、大阪・いずみホール)の為に部分的な書き直しを行った第3版を九州での初演版として演奏する。

編曲者紹介

小穴 雄一 (おあなゆういち) 1957年東京生まれ。慶応義塾高等学校入学後マンドリンを始める。顧問の服部正氏に音楽の喜びを享受。マンドリンを竹内郁子女史に師事。指揮法と楽典基礎を久保田孝氏に師事。4年次に常任指揮者の服部正氏の副指揮者を務める。卒業後は会社勤めの傍らクリスタル・マンドリン・アンサンブルの客演指揮、アンサンブル・アメデオの指揮者兼編曲者、慶応義塾大学マンドリンクラブの常任指揮者として精力的に活動。著書にドレミ楽譜出版社より「マンドリン教本」「マンドリンヒット曲集」がある。氏の編曲は常に独創的な発想から、ポピュラー、クラシックの広い分野でマンドリンに表現力の可能性を追求しており、マンドリン合奏の編曲に書き換え、それこそ「世界に一つしかない」オリジナル曲に仕上げている。今回、当アンサンブルの為に「シベリア狂詩曲」組曲「カレリア」を新たに編曲して頂き、そして快く演奏の許可を頂きました事、誌面をお借りし、心よりお礼申し上げます。

音楽仲間を募集しています。(^_^)/

アマチュアで大切な事は、演奏を楽しむ事だとよく言われますが、この「楽しむ」と言う事が具体的に難しい。プロではないから、ミスタッチしようと、ズレようと気にしない。まあ気楽に！そんな練習や演奏は余り面白くない。だからと言って、縮こまって音を拾い、リズムを合わせても、疲れて面白くない。私達は練習を重ねての音作りの過程を何故にそれほどまでに大切にするのか？それは私達が捕えようとしている「音楽」が、それだけの価値と魅力を備えているものだと思っているからです。練習はその作品の為にするものであって、上手く弾く事が目的では無いのです。その作品の本来持っている音楽の姿が目前に現れ、音楽が音楽によってのみ表現出来る「輝かしい何か」を、少しでも感じる事が出来る様に、毎週2時間半余り真剣に練習をしています。練習は生活の全てでは無く一部です。仕事や家庭で時間的、能力的に制約がありますが、音楽に対して真摯な気持ちで取り組めば、その作品が応えてくれます。「楽しむ」と言う事は試行錯誤や悪戦苦闘の末に授かる、音楽の神様からのご褒美の様なものじゃないかと・・・楽器が弾ける人で、当アンサンブルの音楽的な方向性が十分に理解出来、演奏会に出たいと言う執着心がある人ならば大丈夫！職業、年齢は様々。十年、二十年のブランクを、練習を積重ね見事に復活する人、学校のマンドリンクラブと掛け持ちの頑張り屋の学生さん、マンドリン業界トップレベルの楽譜収集マニア、楽器収集マニアなど、その道の達人も多数在籍。当アンサンブルの方向性に賛同して、福岡を離れても関東や関西から練習に参加する、遠方会員も在籍。とにかく人材には事欠きません。是非一度見学において下さい。